学 位 論 文 審 査 の 要 旨

学位申請者	高橋（菅生）早千江　【論文博士】 【国際日本学専攻　平成１６年度生】 （平成２５年３月単位修得退学）
論 文 題 目	中級学習者の文法項目の誤りに対するリキャストと与え方　−アップテイクと訂正理由の理解に着目して−
審 査 委 員	（主査）　教授　森山　新
	教授　佐々木　泰子
	助教　西川　朋美
	准教授　山腰　京子
	講師　向山　陽子
インターネット公表	○　学位論文の全文公表の可否（　可　・　否　） ○　「否」の場合の理由 ア．当該論文に立体形状による表現を含む イ．著作権や個人情報に係る制約がある ウ．出版刊行されている、もしくは予定されている エ．学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている オ．特許の申請がある、もしくは予定されている ※　本学学位規則第２４条第４項に基づく学位論文全文のインターネット公表について

要　　旨

本博士論文は、第二言語としての日本語の習得に関し、リキャストを用いて学習者のどのような項目の誤りをどのように訂正することで訂正理由の理解を得ているかを検証したものである。対象とする言語項目としては、動詞活用形、補助動詞、助詞とし、第一に学習者の反応である「修正アップテイク」、第二に刺激回想法インタビューを用いて探る「訂正理由の理解」、第三に「修正と理解の関係」を研究対象として、4つの研究を実施した。研究1では「項目間の異なり」について総合的に検討し、研究2では、「リキャストの長さ」を分析の観点として検討した。研究3では「複数の誤り」を1つのリキャストで訂正するという条件の下で検討した。研究4では、助詞のみを対象とし、「メタ言語ヒントを与えるフィードバック」との併用を試みた。

その結果、いずれの研究においても、補助動詞に対するリキャストは訂正理由の理解を得ており、助詞に対するリキャストは訂正理由の理解を得にくい傾向があることが示された。この結果については、対象項目の卓立性だけではなく、意味の明示性、内容語との「かたまり」で項目学習されること、学習者の明示的知識の有無が影響していると考察した。また、修正アップテイクの有無は、リキャストの正確な理解とは関係ないようだと報告した。

本研究は、類型論的に欧米語と異なる日本語を対象とし、先行研究の知見との共通点および相違点を見出した。先行研究では項目の卓立性がリキャストの有効性に関わるとされていたが、本研究は、卓立性は修正アップテイクのしやすさには関わるが、訂正理由の理解が項目間で異なったことの、主たる要因ではないとの見解を示した。意味の明示性、明示的知識、項目学習が関わることは、欧米語の先行研究に沿っていたと報告した。本研究は当該領域の基礎研究として意義があるものと判断した。

審査は 12 月３日、１月 28 日、２月 23 日の３回行われた。１、２回目の審査では、論文全体の構成、表現の分かりにくさ、用語の用い方などに不適切な面があることが指摘されたが、コメントに従い、加筆修正が加えられた。論文発表会では、膨大な研究内容を要点をしぼりわかりやすく発表されるとともに、参加者の質問に対し的確な回答を行っていた。その後に行われた最終審査では博士学位を得る資質に足ると判断され、博士（人文科学）（Ph.D. in Applied Linguistics）の学位を認めることを満場一致で決定した。